

福井城下を描いた4史料にみる建物の屋根表現

— 福井城下の視的考察 その27 —

伊豆蔵 庫 喜*

On the expression of the roof of Fukui castle town in the four historical materials

— The sight of the Fukui castle town, part 27 —

Kouki IZUKURA

This report considers commonness and the difference on the expression of roof in the four historical materials were drawn the Fukui castle town at the late of Edo period. The four historical materials are *FUKUIZYOU-KYUKEI* and *FUKUI-ONKOTYO* and two pieces of *UMA-ODOSHIZU*. Through the color and the line of the expression of roof, the difference between the roofing material and method of roofing mentioned clearly on the four historical materials. The color of the expression of roof and the using of the line properly were exactly the same on the four historical materials.

1. はじめに

これまで幕末の福井城下を描いた『福井城旧景』¹⁾、『福井温故帖』²⁾、『安政時代馬威し図』³⁾、『馬威図』⁴⁾の4つの史料にみられる建物の屋根表現を史料ごとに検討した⁵⁾。その結果、建物の屋根はどの史料においても瓦や茅などの葺材の違いが明確に色分けされていること、また同じ葺材でも線の使い分けで瓦き方の違いを示していることなどが指摘できた。

本稿は上記4史料の屋根表現の共通性や相違について考察し、福井城下における諸建物の屋根葺材や葺き方を特定することを目的とする。

2. 史料について

『福井城旧景』(以下『旧景』と略記)と『福井温故帖』(以下『温故帖』)は折本構成の図集で、絵図ごとに描かれている建物や場所が異なっている。

一方、『安政時代馬威し図』(以下『馬威し図』)と『馬威図』はともに六曲一双の屏風図であり、ともに福井藩の年中行事で本町通りを中心に行われていた馬威し⁶⁾の様子を描いたものである。

(1) 『福井城旧景』(史料1)

『旧景』は昭和2年(1927)に郷土史家の山下與平が、旧福井藩士大越銀次郎家に所蔵されてい

* 建設工学科建築学専攻

た原本を書き写したものである⁷⁾。絵図は全部で25図あり、城内の櫓や門、城下の武家屋敷や九十九橋周辺などが描かれ、図の中には登城途中の家臣や天秤棒を担いで物を売り歩く商人、川舟で足羽川を往来する人々などもみられる。

作成年代の記述はないが、25図の中に文久2年(1862)に架橋された新橋や元治元年(1864)まで西三ノ丸に置かれていた御座所がみられること、そして各図の内題や添書きの武家屋敷名などを考慮すると、この『旧景』は文久2年から元治元年(1864)頃の福井城下を描いたものと判断できる⁸⁾。

(2)『福井温故帖』(史料2)

『温故帖』は、明治14年(1881)に旧福井藩士の寺島知義が作成したものである⁹⁾。史料1同様、幕末から明治にかけての福井城内の櫓や門、城下の武家屋敷を描いた19図の他、和歌を交えた随想などが収集されている。同帖にも駕籠の列や袴姿の武士、足羽川を渡る繰り舟などが描かれており、当時の情景が窺える。

史料1と2は建物の形態や樹木、人物などの特徴を忠実に描写されている。特に、各図にみられる多くの建物の位置や足羽山や百間堀の方向が幕末の城下図¹⁰⁾に合致し、信憑性が高い絵図史料といえる。

(3)『馬威し図』(史料3)

福井市立郷土歴史博物館所蔵の『馬威し図』は、昭和12年(1937)に菱川師福が93歳の時に描いた屏風図である¹¹⁾。右隻は、九十九橋北詰めから本町通りまでを中心として、対岸の町人地の一部も描かれ、本町通りには史料1・2では確認できなかった町家の様子もみることができる。左隻は桜御門から鉄御門までの間にあった武家屋敷の一部が描かれている。

この屏風図は昭和初期に描かれたものであるが、桜御門や鉄御門および城下の本町や片町通りなどの位置関係は幕末の城下図と一致し、図の端書に「安政時代」とあることから¹²⁾、師福が若き頃を思い浮かべながら福井城や城下を描いたものとみてよい。

(4)『馬威図』(史料4)

福井県立歴史博物館所蔵の『馬威図』は史料3同様、馬威しの様子を描いたものである。この絵図の作者や年代は不明であるが、堀などに用いられている群青色は明治以降に伝えられたウルトラマリンは使われていないから¹³⁾、それ以前の幕末頃に作成された屏風図と考えられる。

右隻には九十九橋北詰めから桜御門までの本町通りを中心にした町人地の町並みが、左隻には桜御門から百間堀までの武家屋敷の様子が描かれている。ところが、城内の櫓や城門、城下の武家屋敷などの位置は城下図と一致しない点が多く、やや正確性に欠ける。

3. 屋根表現について

以上の4つの史料にみられる建物の屋根の色は、青色・灰色系・茶色系の3種類に分けられ、線の表現は実線と波線、たて線とよこ線が用いられている。これらの色と線の組み合わせを整理したものが表1である。また、各種の屋根の具体例を示したものが図1から図9である。

表1 4史料にみられる主な建物の屋根表現

| 色別 | | 材料 | 描法 | 葺き方 | 建物名 | 史料名 | | | | 備考 |
|----------|-----|--------|-----------|-----------|-------------|---------|---------|--------|---------------------|---------------------|
| | | | | | | 『福井城旧景』 | 『福井温故帖』 | 『馬威し図』 | 『馬威図』 | |
| 青色 | 石瓦 | たて太い実線 | 本瓦葺 | 翼櫓 | ○ | ○ | ・ | ・ | 古写真で確認 丸瓦・軒丸瓦の表現 | |
| | | | | 坤櫓 | ○ | ○ | ・ | ・ | | |
| | | | | 瓦御門 | ○ | ○ | ・ | ・ | | |
| | | | | 太鼓御門 | ○ | ○ | ・ | ・ | | |
| | | | | 下馬御門 | ○ | ・ | ・ | ・ | 丸瓦・軒丸瓦の表現 | |
| | | | | 鉄御門 | ○ | ・ | ○ | ・ | | |
| | | | | 桜御門 | ○ | ○ | ○ | ○ | 史料で笈谷石製とある | |
| | | | | 御門 | ○ | ○ | ・ | ・ | | |
| 隅櫓 | ○ | ・ | ・ | ○ | 古写真で確認 | | | | | |
| 灰色系 | 濃灰色 | 土瓦 | よこ波線 | 棧瓦葺 | 土蔵(山里丸・セツ蔵) | ○ | ○ | ・ | ・ | |
| | | | | | 土蔵(武家屋敷) | ○ | ○ | ・ | ○ | |
| | | | | | 土蔵(町家) | ○ | ・ | ・ | ○ | |
| | 薄灰色 | 檜皮 | 線なし | 檜皮葺あるいは柿葺 | 狛犬(上級武家) | ○ | × | ・ | ・ | 軒先が黒色で塗られている |
| 茶色系 | 茶褐色 | 赤瓦 | たて太い実線 | 本瓦葺 | 本丸御殿 | ○ | ○ | ・ | ・ | |
| | | | | | 長屋・厩(南二ノ丸) | ○ | × | ・ | ・ | |
| | | | よこ波線 | 棧瓦葺 | 御座所 | ○ | ・ | ・ | ・ | |
| | | | | | 荒木家(豪商) | ・ | ・ | ○ | ○ | |
| | | | | 高札場 | ・ | ・ | ○ | ・ | | |
| | 濃茶色 | 檜皮 | 線なし | 檜皮葺あるいは柿葺 | 佐野家(上級武家) | ○ | ・ | ○ | ・ | 軒先が黒色で塗られている |
| | | | | | 与力番所(二ノ丸) | ○ | ○ | ・ | ・ | |
| | | 茅 | たて細い実線 | 茅葺 | 坂井家(中級武家) | ○ | ・ | ・ | ・ | 茅の表現 |
| | 薄茶色 | 板 | たて細い実線 | 板葺 | 土塀(城門・武家屋敷) | ○ | ○ | ○ | ○ | 御本城櫓や武家屋敷の下見板も同色である |
| | | | | | 腰掛 | ○ | ・ | ・ | ・ | |
| 格子状の細い実線 | | | 石置 | 町家 | ○ | ・ | ○ | ○ | | |
| | | | | 町家 | ○ | ・ | ○ | ○ | 圓石の表現 | |
| | 柿 | 線なし | 檜皮葺あるいは柿葺 | 御泉水邸 | ・ | ○ | ・ | ・ | 古写真で確認 | |

*1: ○は表現アリ、・は表現ナシ、×は違う表現

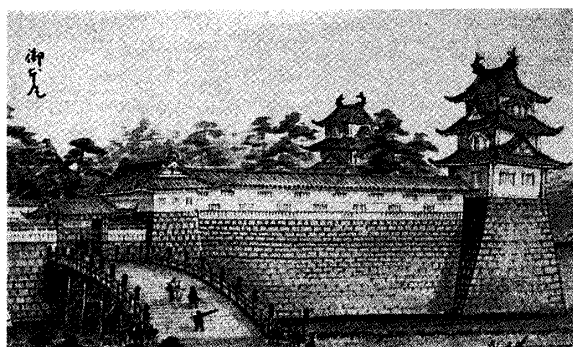


図1 青色・たて太い実線（『福井温故帖』より）
瓦御門と巽櫓は、笏谷石瓦の本瓦葺である。



図2 濃灰色・よこ波線 (『馬威図』より)

町家の土蔵は、土瓦の棧瓦葺である。

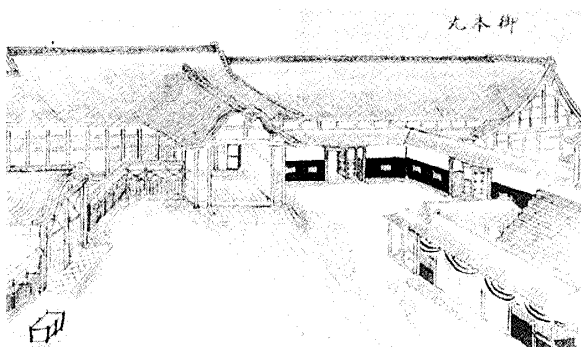


図3 茶褐色・たて太い実線（『福井城旧景』より）
本丸御殿の屋根は、赤瓦の本瓦葺である。

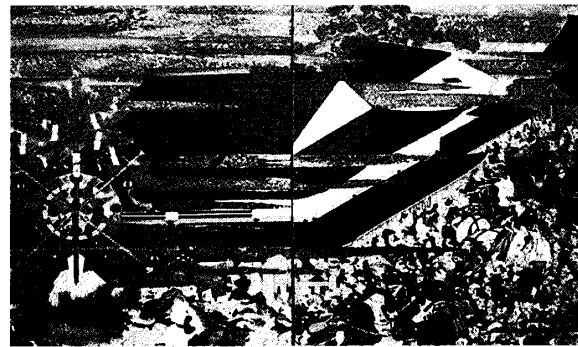


図4 茶褐色・よこ波線（『馬威図』より）
荒木家(豪商)の屋敷は、赤瓦の棧瓦葺である。

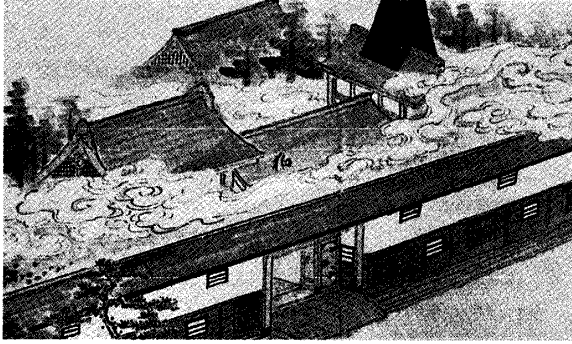


図5 濃茶色・線なし(『福井温故帖』より)
 狛家屋敷(上級武家)は、檜皮葺あるいは柿葺である。



図6 濃茶色・たて細い実線(『福井温故帖』より)
 手前の中級武家屋敷の屋根は、茅葺である。

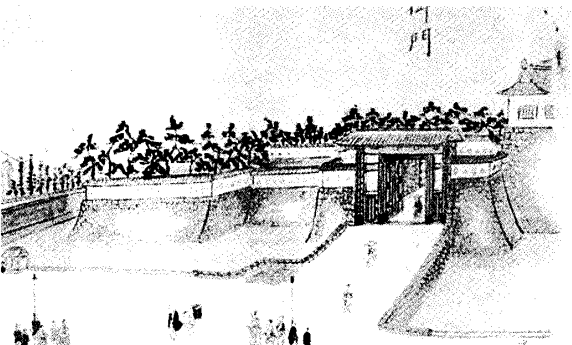


図7 薄茶色・たて細い実線(『福井城旧景』より)
 門の両脇に続く土塀は、板葺である。



図8 薄茶色・置石あり (『馬威し図』より)
 本町の町家は、板葺の石置屋根である。

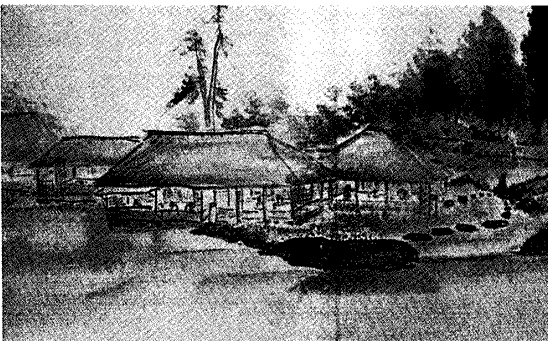


図9 薄茶色・線なし(『福井温故帖』より)
 御泉水邸の書院は、柿葺である。



写真1 御泉水邸の書院(戦災による焼失前)
 (『数奇屋住宅聚』より)

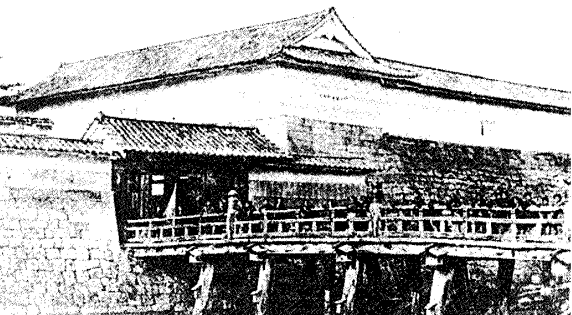


写真2 明治期の瓦御門
 (『ふるさとの思い出 写真集 福井』¹⁴⁾ より)



写真3 明治期中級武士の屋敷(蟻川家)
 (『ふるさとの思い出 写真集 福井』 より)

3.1 色と屋根材料

(1) 青色

青色の屋根は、福井城の本丸の瓦御門や巽櫓(図1)をはじめ、南二ノ丸の太鼓御門や外郭の桜御門などにみられる。このうち桜御門は、『福井藩史話(上)』¹⁵⁾に「屋根は福井城の如く笏谷石の石瓦を用いて荘厳堅固を極めた」とある記述から、笏谷石瓦¹⁶⁾が葺かれていたことが明らかである。したがって、青色は笏谷石瓦を示していると判断できる。

(2) 灰色系

灰色系は2種類みられる。ひとつは武家屋敷や町家の土蔵(図2)にみられる濃灰色で、この色の屋根には棟石や鬼瓦も描かれているものが多い。土蔵は防火面でも瓦葺が一般的であり、色調からも濃灰色は土瓦を示していると考えられる。

もうひとつは、狛家をはじめ上級武家屋敷の御殿や長屋門にみられる薄めの灰色である。この薄灰色もやはり土瓦とみるのが妥当である。ただし、薄灰色は『旧景』にみられるだけで、他の3史料では同じ建物に濃茶色が使われている。

(3) 茶色系

どの史料でも茶色系で塗られた屋根が一番多いが、茶系には茶褐色・濃茶色・薄茶色の3種類がみられる。茶褐色は本丸御殿(図3)や御座所をはじめ豪商の荒木家(図4)などの屋根にみられる。これらの屋根の色は先の土瓦とみられる濃灰色と違い、やや赤っぽい色をしていることから、茶褐色は越前特産の赤瓦¹⁷⁾を示しているとみられる。

濃茶色は、『旧景』以外の上級武家屋敷の御殿や長屋門(図5)や中級武家屋敷(図6)の主屋にみられる。また、薄茶色は門や屋敷回りの土塀(図7)や御泉水邸の書院(図9)にみられる。御泉水邸(写真1)の書院は柿葺で、台所部分が茅葺である¹⁸⁾。したがって、これら濃茶色と薄茶色の屋根は、檜皮や柿、茅などを示していると思われる。

3.2 描法と葺き方

(1) たて太い実線

たて方向に太い実線が使われている屋根は、城内の櫓や門に多くみられる。明治期の本瓦葺の瓦御門(写真2)をみると、屋根はたて線が強く感じられる。したがって、たての太い実線は本瓦葺を示していると思われる。この表現をもつ瓦御門や桜御門の屋根は軒が丸く表現されていて、丸瓦や軒丸瓦も描かれている。

(2) よこ波線

武家屋敷や町家の土蔵の屋根は、よこ方向に波線が示され、棟には棟石や鬼瓦も確認できる。したがって、波線は棧瓦を表したものと思われ、よこ波線入りの屋根は棧瓦葺を示しているとみてよい。

(3) たて細い実線

たて方向に細い実線が入る屋根は2種類確認できる。ひとつは、図6の中級武家屋敷(手前)のように、明らかに茅葺と判断できるものである。

これに対して、図7の土塀や腰掛および本町や片町通り沿いの町家の屋根は、先の茅葺とは異なった表現がみられる。すでに報告したように¹⁹⁾、腰掛や土塀、町家の屋根の多くは板葺でありしかも町家の一部に石を載せている例も確認できるから、板葺の石置屋根と判断できる(図8)。

(4)線なし

この他、狛家など上級武家屋敷の御殿や長屋門ならびに御泉水邸の書院の屋根には、線がまったくみられず、軒先が黒色で厚く塗られている。これらの中で御泉水邸の書院は柿葺であり(図9)、線なしの表現は柿葺あるいは檜皮葺を示している可能性が高い。

3.3 史料にみる屋根表現

以上のように、屋根の色から材料を、線の種類や使い分けから葺き方を特定することができた。これらをまとめると、次のようになる。

(1)青色、たての太い実線・・笏谷石瓦の本瓦葺

青色は笏谷石を、たての太い実線は本瓦葺を示している。すなわち、青色でたての太い実線で描かれた屋根は笏谷石瓦の本瓦葺とみてよい。この屋根をもつ建物の例として、本丸や二ノ丸に建つ隅櫓や外郭の桜御門などがある。これらの屋根表現をみると、表1のように『旧景』や『温故帖』など4つの史料とも色、描法が同じである。

(2)濃灰色、よこ波線・・土瓦の棧瓦葺

濃灰色は土瓦、よこ波線は棧瓦葺であり、濃灰色でよこ波線の屋根は土瓦の棧瓦葺といえる。土瓦の棧瓦葺は武家屋敷や町家の土蔵の屋根に多くみられ、史料3の『馬威し図』を除く3史料が色、描法とも同じである。

(3)茶褐色、たての太い実線(よこ波線)・・赤瓦の本瓦葺(棧瓦葺)

茶褐色は赤瓦と判断でき、たての太い実線は本瓦葺を示していることから、茶褐色でたて太い実線の屋根は、赤瓦の本瓦葺と判断できる。この赤瓦の本瓦葺は本丸御殿と御座所の屋根にみられるが、史料3・4の『馬威し図』には描かれていない。しかし、『旧景』と『温故帖』では屋根の色、描法とも同じ表現である。

同じ茶褐色であるが、『馬威し図』の両図にみられる豪商の荒木家や高札場の屋根には、よこ波線が示されている。よこ波線は棧瓦葺を示していることから、こちらは同じ赤瓦を用いた棧瓦葺と思われる。

(4)濃茶色、たての細い実線・・茅葺

濃茶色で、たての細い実線の屋根は茅葺を示している。茅葺の例は、神明社前の坂井家や桜ノ馬場付近の中級武士の屋敷²⁰⁾であるが、屋敷名と位置が一致するのは『旧景』にみられる坂井家のみである。ところが、4史料とも明らかに茅葺と判断できる建物が城下周辺部に多く、同じ中級武士の蜷川家(写真3)の主屋や長屋も茅葺である。

(5)薄茶色、たての細い実線・・板葺

薄茶色で、たての細い実線の屋根は板葺であり、城門や武家屋敷の土塀および城下の町家の屋根に多い。中でも土塀の屋根は、4つの史料とも色、描法とも同じである。

(6)濃(薄)茶色、線なし・・檜皮葺あるいは柿葺

柿葺と檜皮葺の屋根は史料ごとに色、描法とも違った表現がされており、材料や葺き方を特定することができない。例えば、狛家(上級武家)の屋根をみると『旧景』では薄灰色で線なしであるが、『温故帖』では濃茶色である。さらに、同じ上級武家屋敷の佐野家は『旧景』と『馬威図』とも濃茶色で線なしの表現である。

一方、御泉水邸の屋根は、写真1から柿葺と判断できるが、御泉水邸が描かれている史料は『温故帖』だけである。このように、柿葺と檜皮葺の表現は色、描法とも顕著な違いはみられず檜皮葺か柿葺かは判別できない。

4. 福井城下における諸建物の屋根葺材

以上、4史料に描かれている建物の屋根表現をもとに、城内や城下の主な建物の屋根をみると、以下ようになる。

(1)城内

本丸御殿や西三ノ丸の御座所は藩主に関連する建物で、これらの屋根はいずれも赤瓦の本瓦葺である。福井城の正門である瓦御門や本丸の東西隅に建つ巽・坤両櫓は笏谷石瓦の本瓦葺であった。太鼓御門をはじめとする城門の多くも瓦御門同様、笏谷石瓦の本瓦葺である。

一方、山里丸やセツ蔵の土蔵の屋根は土瓦の棧瓦葺である。南三ノ丸の下馬御門前の腰掛や土塀の屋根は板葺であった。このように、城内の建物では赤瓦や笏谷石瓦、土瓦、板などのいろいろな屋根葺材が用いられていたことになる。

(2)武家地

狛家や佐野家など上級武家屋敷の長屋門や御殿の屋根の多くは、檜皮葺あるいは柿葺とみられる。屋敷回りの土塀の屋根は板葺である。これに対して、坂井家などの中級武士の主屋や長屋の屋根は茅葺である。したがって、武家屋敷は身分によって屋根葺材が違っていたことがわかる。

(3)町人地と周辺部

町人地の本町・片町通り沿いの町家の大半は板葺である。しかし、同じ町家でも豪商の荒木・駒両家の屋根は赤瓦の棧瓦葺である。また、城下周辺部の町家や下級武士の屋敷などは板葺もしくは茅葺屋根が多かった。

5. おわりに

以上、幕末の福井城下を描いた4史料にみられる建物の屋根表現を検討した。その結果、いずれも材料や葺き方の違いを、色と線の使い方で明確に描き分けられていて、その色や線の描法は4史料とも共通していたことがわかる。

そして、本丸を含む城内の建物には、越前特産の赤瓦や笏谷石瓦が用いられていたこと、上級武家屋敷の多くは檜皮葺あるいは柿葺であったこと、城下や周辺部の町家や下級武家屋敷の多くは、板葺もしくは茅葺であったことなどが指摘できた。

【註】

- 1) 松平宗紀氏所蔵『松平文庫』福井県立図書館保管
- 2) 松平宗紀氏所蔵『越葵文庫』福井市立郷土歴史博物館保管
- 3) 福井市立郷土歴史博物館所蔵『春嶽公記念文庫』
- 4) 福井県立歴史博物館所蔵
- 5) 『福井城旧景』と『福井温故帖』、『馬威図』の屋根表現については、拙稿「福井城下の視的考察 20・22～23・25」日本建築学会北陸支部研究報告集 44 号(2001.7)・48 号(2005.7)や福井工業大学研究紀要 33 号(2002.3)・34 号(2003.3)で詳しく報告している。
- 6) 馬威しは毎年正月 14 日に左義長神事として行われていた。馬の乗った藩士が桜御門から城外に乗り出し、本町・呉服町を疾駆しながら柳御門に入って城内に戻る間に、町人が鉦や太鼓を叩いて馬の疾走を妨害して楽しむ行事である。
- 7) 『福井城旧景』の巻末に「跋（前略）この福井城旧景も福井藩士大越銀次郎翁の所持なりしが大正七年の正月頃藩主松平家に寄附せらるること聞きし折、希ひ得て浄写せしもので、もとより絵筆に親みしことがないから筆の拙なきことは勿論なれども原画と些の相違のなきことは保持したつもりである。観らるるの諸士幸ひ諒せられたい。（後略）昭和二年七月中元 福井市佐佳枝宮の旧址にて 春溪 山下与平 記」とある。
- 8) 福井藩の正史である『国事叢記』や『片磧記』によると、新橋は文久 2 年(1862)に架橋されている。また、御座所は元治元年(1864)に東三ノ丸に新設され、西三ノ丸から移されている。
- 9) 福田源三郎『越前人物誌中・下巻』思文堂(1972) p 257 によると、寺島知義は、明治初期に古絵図を収集または謄写した人物である。『福井温故帖』も寺島が個人的に収集したものを集めた書である。
- 10) 註 1 と同じ、『福井御城下絵図』文化 3 年(1806)および慶応年間(1865～67)
- 11) 菱川師福は、明治から大正期の絵師で、馬威しの図を得意としており、この絵は 93 歳の時の作品である。左隻の端書に「福井松平藩之圖 九十三翁 菱川師福筆 □□印」とある。
- 12) 右隻の端書に「安政時代馬威之圖 九十三翁 菱川師福筆 □□印」とある。
- 13) 『夢楽洞万司の世界』福井県立図書館(1996.4) p 133
- 14) 舟沢茂樹・松原信之共著編『ふるさとの思い出写真集 明治・大正・昭和 福井』歴史図書社(1979.1)
- 15) 森恒救『福井藩史話(上)』歴史図書社(1975.10) p 196
- 16) 笏谷石は福井市内の足羽山から切り出される青みかかった凝灰岩で、笏谷とは産出地の名称から呼ばれている。この笏谷石瓦は越前特産のものである。
- 17) 赤瓦とは、瓦の表面に酸化鉄(紅柄)溶液を塗布して焼成するため、茶褐色あるいは暗赤褐色している瓦を指す。赤瓦も先の笏谷石瓦同様、越前特産のものである。
- 18) 写真 1 の御泉水邸の書院は、戦災で焼失する以前のものである。平成 5 年(1993)に旧状に復元・再建されている。
- 19) 註 5 と同じ
- 20) 城下東南隅の桜ノ馬場周辺には中級武士の屋敷が多く配置されていた。蜷川家も桜ノ馬場近くの新屋敷にあった。

(平成17年11月25日受理)